



まほろん通信

VOL.19

(平成 18 年 1 月 15 日発行)
(財) 福島県文化振興事業団
福島県文化財センター白河館
〒 961-0835
白河市白坂一里段 86
TEL 0248-21-0700 (代)
FAX 0248-21-1075
URL <http://www.mahoron.fks.ed.jp>



「まほろん森の塾」 第五期生の活躍

「まほろん森の塾」とは、年間を通じて昔の生活全般について広く体験しようという、まほろん最大の連続体験講座です。雨に悩まされた春先の「古代米の田植え」に始まり、「縄文時代の櫛作り」や「石器づくり」、煙に巻かれながらもがんばって料理した「春のお泊り会」など、原始や古代の生活を広く体験してきました。塾生たちの上達は早く、本物と見まちがうような石器や土器も作れるようになりました。しかし今回の第五期塾生の本領は、そんなところにはなかったのです。始まったころには「誰かにやってもらえばいいや。」と、自分の仕事をほっぽらかして遊びにいていた塾生もいました。しかし、夏の「ボランティアイベント」のお手伝いあたりから、それが見事に見られなくなったのです。その日、塾生たちは分担時間を守り、声を掛け合い、来館者に完璧な対応をしました。お客さんの「ありがとう」の一言に励まされた面もあったようです。塾生たちは、確実に変わりました。それが実を結んだのが、秋の古代米の大豊作だったといえるでしょう。泥だらけになりながら田んぼの雑草とりをしていた塾生、黙々と古代食の材料を切っていた塾生、みんなの後片付けをこっそりしてくれていた塾生、いろんな塾生がいましたが、合言葉はみんな「責任と協力」、そんな一年間でした。



鉄づくりイベント報告 その1

「せーの！！」5・6人で、製鉄炉の底にできた熱くて重い鉄の塊を、パイプで少しずつ動かします。そして、水槽の中にそれを沈めます。その瞬間、水蒸気が辺り一面に広がり、水が一瞬で熱湯となりました。

右の写真は、去る11月5・6日に行われた「鉄づくり」イベントのクライマックスのようすです。

今回の鉄づくりでは、2年前の操業結果を受け、今から1,200年前に稼働した1基の製鉄炉を原寸大で復元し、これの操業を行いました。復元した製鉄炉は、原町市にある大船迫A遺跡の15号製鉄炉です。この炉は、平安時代9世紀前半の炉で、調査の結果、最低でも2回の操業が行われていたことが判明しています。そして、2回目の操業では操業中に炉壁が倒壊し、廃棄されたままの状態で見つけられました。

古代の鉄づくりでは、製鉄炉は1回限りのもので、操業が成功しようがしまいが、鉄を取り出すために、炉は壊されてしまいます。このため、当時の炉の大きさが明確に把握できません。それが、この大船迫A遺跡15号製鉄炉では、操業中のアクシデントがあったため、炉の大きさを推測することができました。

炉の大きさは、炉の底に残る熱の痕跡から、幅35cm程度、長さ185cm程度であり、倒壊した炉壁から、その高さは110cm程度と判明しました。

ただ、この規模は前述したように操業で熱を受けた痕跡からの推定ですので、構築時の炉の大きさは推測するしかありません。

今回、最も苦慮したのは、この構築時の大きさ、特に炉壁の厚さでした。これを推定することは非常に困難です。

なぜなら、発掘調査で確認できる炉壁は、全て操業により炉の内側が溶解したものばかりで、出土した炉壁の厚さが、そのまま構築時の炉壁の厚さではないからです。操業により、どの程度、炉壁が溶解したのかわかりません。

このため、今回の操業では、炉の大きさが類似している明治30年代に稼働していた島根県砺波タタラや備谷タタラの構築時の図面を参考にしました。右の図に示したのがその図面です。

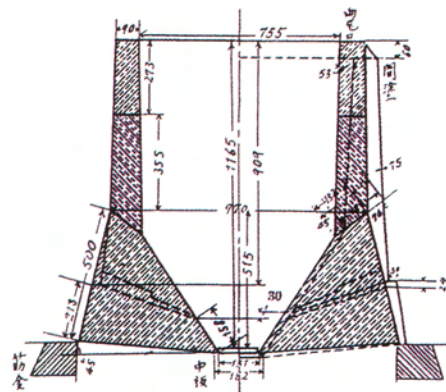
これにより、復元炉の大きさは、最大で幅90cm、長さ240cm、高さ120cmとなりました。炉壁の厚さは、最も厚い炉の



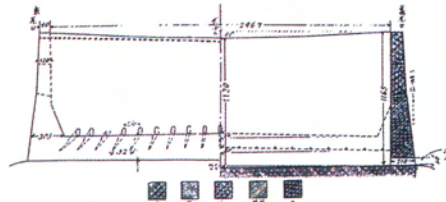
＜できた鉄（ケラ）を動かす＞



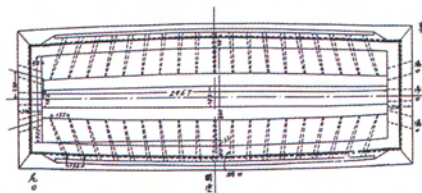
＜ケラが水槽に入った瞬間＞



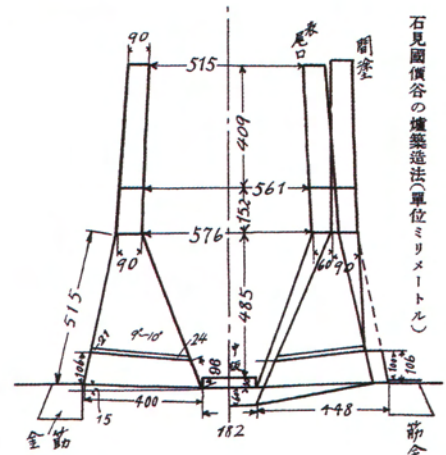
法造築城の波砥國等鉛 圖七十三第
(ルメートル単位)



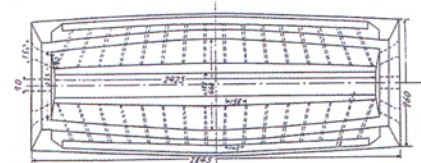
(ルメートル単位) 島根縣波砥國築城の波砥國等鉛 圖九十三第



島根縣波砥國築城の波砥國等鉛 圖十四第
(ルメートル単位)



(ルメートル単位) 備谷國築城の各側面見石



(ルメートル単位) 備谷國築城の各側面見石

＜砺波タタラ(左)と備谷タタラ(右)：1933 倭 國一「古代の砂鉄製錬法」より転載＞



＜炉構築のようす（羽口の設置）＞

底で40cm、炉の頂部で15cmになりました。

実際に構築してみると、炉の下の方では30cmを超える厚さがないと、大きな炉のため、粘土の重さで炉が倒れてしまいます。明治30年代の記録が非常に正確であったことを感じました。

これ以外の送風装置や、原料である砂鉄、燃料である木炭、炉を構成する粘土などは、前回と同様のもの（砂鉄は阿武隈川の支流隈戸川のもの、燃料は岩手県産の松炭、粘土は福島県南相馬市（旧鹿島町）のもの、白河市（旧大信村）のもの）を使用しました。

また、送風する土管である羽口の挿入角度は、前回よりやや浅い30°としました。

右上の写真に示したように、砂鉄の選別作業や、羽口



＜砂鉄選別作業のようす＞

づくりなどの作業は、多くの来館者のみなさまにも体験していただきました。砂鉄の選別作業は、砂鉄と砂を水流を使って比重選別を行う「かなな流し」を行いました。丁度、夏の暑い時期に実施したので、大変好評でした。

その後、炉を構築する作業場の乾燥や、炉の下部部分の構築、送風装置の設置、炉の構築などの作業を経て、日本で初めての、踏みふいごによる平安時代の原寸大製鉄炉の操業は、11月5日午前11時48分より始まりまし。操業のようすについては、次号でお話ししますので、ご期待ください。



春のてんじ案内

しんべんむつのにふどき まきのご 新編陸奥国風土記 巻之五

—会津郡・耶麻郡その1—

会期：平成 18 年 3 月 11 日（土）～5 月 14 日（日）

会場：まほろん特別展示室

観覧料：無料

古代の国内各地の地誌を記した書物としては、奈良時代に編纂されたといわれる『風土記』が大変有名ですが、当時「陸奥国（むつのに）」と呼ばれていた東北地方についての風土記は残されていません。そこで、まほろんに収蔵されている考古資料から当時の陸奥国の姿を復元し、新たな風土記の世界を記そうと始まったのが、まほろん春のてんじ「新編陸奥国風土記」です。このシリーズでは、古代の「郡（こおり）」ごとに展示を行ってききましたが、今回はその巻之五として「会津郡・耶麻郡」をテーマとしました。当地域については、磐越自動車道発掘調査に関する膨大な量の資料がまほろんに収蔵されています。そのため、展示も前半と後半の2回に分け、今回は前半として古代陸奥国成立以前の、原始時代の会津地方をご紹介します。

今回の展示では、縄文時代の大きなムラである磐梯町法正尻遺跡の



＜法正尻遺跡出土の縄文土器＞

見事な縄文土器や、弥生時代中期のお墓の跡である会津若松市一ノ堰B遺跡から出土した弥生土器やアクセサリー類などを展示します。また、縄文時代から平安時代までの長きにわたり、狩りなどの時の仮のねぐらとして使

われた西会津町塩喰岩陰遺跡の調査など、考古学を理解するうえで貴重な成果も、わかりやすくご紹介いたします。私たちは一見して、縄文土器の複雑な文様、繊細な石器の造形だけに目を奪われがちです。しかし、それらの資料を詳細に観察すると、当時の暮らしぶりや、人とモノの交流のようすなどが、おぼろげに見えてきます。

「会津」という名の由来として、畿内より地方の支配のために東海と北陸に遣わされた将軍が行き会った土地を、「相津」と名づけたという伝承があります。この伝承の真偽はともかくとして、この伝承以前である原始の暮らしにおいても、会津地方は人やモノ、そして近隣の文化が行き交う接点となる場所であったようです。考古資料から描く、新しい豊かな陸奥国風土記の世界に、ぜひ足をお運びください。



研修課より

1～3月文化財研修のご案内

風花が舞い始めたとおもいきや、夜が明けたら雪景色の季節となりました。冬も元気に魅力ある研修を企画しております。来期に向けた充電にまほろん文化財研修をぜひ受講下さい。

1月28日に予定されていた考古学と地方史研修は、諸般の事情により、やむを得ず中止とさせていただきます。受講を予定されておられた皆様には大変申し訳ございませんが、ご理解の程何卒よろしくお願い申し上げます。

2月12日は、無形の文化財研修Ⅱ「福島県のまつり」を行います。今回は懸田弘訓先生を講師にお招きし、「白河市根田安珍歌念仏踊り」をテーマに、保存会の方々による歌念仏踊りの実演を織り交ぜながら研修いたします。無形の文化財保護行政を担当されている担当職員の方ばかりでなく、実際に民俗芸能を保存されている方々にとっても参考になる研修です。

2月24日～25日には、会津若松市文化センターを会場に、報告書デジタル原稿作成研修を行います。ソフトを用いてのデジタルトレース実習やDTP編集の方法な



<土器復元研修のようす>

どを学び、発掘調査報告書作成の効率化と経費節減を図るための研修です。

3月4日には、体験学習支援研修6「装身具づくり」を行います。今回は、原始・古代の玉類の穿孔技術を再現し、石に孔を開け、勾玉や大珠などの装身具を作ります。

3月11日には、遺跡調査技術研修を行います。福島県内における集落跡の調査事例をもとに、遺跡の集落景観などを検討し、集落跡の調査技術の向上を図ります。

総務管理課より

バックヤードツアー③ — 一般収蔵庫(1) —

まほろんの一般収蔵庫は、内部の大きさが奥行き約81m、幅約34m、面積約2,800㎡で、国内の埋蔵文化財関係施設の中では最大級の規模を誇っています。中には1・2階合わせて1,454台のスチール棚が整然と並んでいます。

これらの棚には、福島県教育委員会が今までに発掘調査した時に出土した土器・石器などの遺物類や写真・図面などの記録類が、平成17年12月現在で60×44×15cmの箱に換算して42,720箱分収納されています。

土器・石器などの遺物類の整理箱を見てみると、それぞれにオレンジか白のカードが付いています。オレンジのカードの箱には報告書に掲載された資料が納められ、白いカードの箱には報告書に掲載されなかった資料が納められています。資料借用や資料閲覧の希望が多いのも、このオレンジのカードがついた箱に納められた格好の良い土器などの資料です。



<オレンジカードの箱と白いカードの箱>

さらに、整理箱の中を見てみると、大きな土器や格好の良い土器は、毛布のようなものでくるまれています。また、土器の破片は小さな座布団のようなクッションの上にきれいに並べられ、白い箱に納められています。これらのクッション類は、資料の移動の際や時々やってくる地震の時に土器が壊れることを防ぐための物です。

まほろんからのお知らせ

おでかけまほろん募集

来年度は20ヵ所で「おでかけまほろん」を実施する予定です。今月中に応募要綱を小中学校等に配布し、ホームページにも募集案内を掲載しますので、ご希望の学校・施設・団体はお見逃しなく！



ご利用案内

- 開館時間 9:30～17:00(入館は16:30まで)
休館日 月曜日(月曜日が祝日・休日の場合は開館し、その翌日が休館)、国民の祝日の翌日(土曜日・日曜日にあたる場合は開館)
入館料 無料(体験学習によっては、材料費が必要な場合もあります。)
その他 団体(20名以上)でご利用の場合は、事前にご予約ください。